It’s all up to you.

期間:2025年 7月22日～8月6日
大熊 優依 / Yui OKUMA

1.はじめに

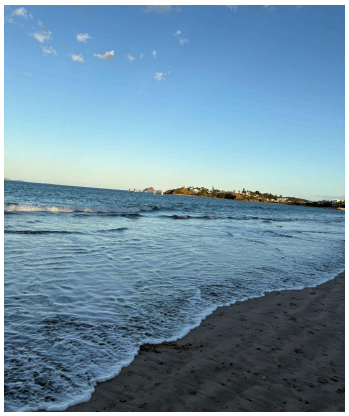
この度、埼玉県スカラシッププログラムを通して、オーストラリア・クイーンズランド州へ派遣していただきました、大熊優依です。まずは、このような素晴らしい経験を提供してくださった埼玉県や県国際課をはじめとする関係者の皆様、そしてこの留学を通じて出会い、かけがえのない時間を共にした全ての方々に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

私は将来、漠然とではありますが、世界を舞台にして働くという夢を抱いています。国際社会で活躍するには、語学力は勿論、多様な価値観を理解し尊重した上で意見をもつことが求められます。留学中、たくさんの人との関わりの中で、異なる文化や新しい考え方に触れ、自分の視野を広げる大きな機会になったと実感しています。プログラムで得た貴重な経験を、少しでも皆さんにお伝えできればと思います。

2.Yeppoon

オーストラリア大陸の北東に位置するクイーンズランド州。埼玉県の約454倍という広大な面積を持つ一方で、人口は約0.8倍しかいません。私たちが滞在したのは、州都ブリスベンからさらに飛行機で1時間半（ホストファミリーによれば車で8～9時間）かけて到着するYeppoon（イェプーン）という街でした。私たちが訪ねた7、8月は、四季における冬であり日中は20℃を超える温かさ、朝夜は10℃以下と、寒暖差が激しかったです。場所によって気温が大きく変わり、滞在中に大雪で停電している地域もありました。皆、海水浴ができる夏が恋しいと嘆いていたことも印象的です。それでも、現地の大多数がTシャツや半袖の制服を着ており、私もそれに便乗して肌寒さを隠しながら薄着で生活しました。（日中は丁度良い日もありました。）地形は、山や海など自然に囲まれていて、美しいビーチ沿いでは、時間がゆったりと流れているように感じられました。

現地の友人たちは、放課後にセイリングやライフセービングの練習に励んでおり、海に面した街ならではの光景でした。オーストラリアでは、ほとんどの家庭が犬を飼っているそうで、私もホストファミリーの愛犬、モカを連れてよくビーチで散歩をしました。ボートを持つ家庭が多く、私のホストファザーも趣味が釣りで、自家用ボートを持っていました。土曜日に海沿いを歩くと、昼間からバーが賑わい、お酒を楽しむ様子がよく見られました。ドイツ人留学生の友人は多くの人が日中に酔っ払っていることが不思議でたまらないと、興味津々でした。



お店の閉店時間は早く、放課後ショッピングモールに行った際、ほとんどの店が閉まっていました。スーパーマーケットも19時頃には閉店してしまい、日本のコンビニの話をすると皆羨ましいと嘆いていました。また、街の規模が小

さいことや、多くの学生がアルバイトをしていることから、行く先々で知り合いを見かけるそうです。実際私も、マクドナルドでアルバイト中の友人に遭遇したり、週末に海で見かけたよと声をかけてもらうなど、温かい交流がありました。

移動手段は、電車がないため、基本的に車を利用していました。多くの車が前部にバンパーをつけており、理由を尋ねると、カンガルーが頻繁に出没するからとのことでした。実際、道路脇で多くの野生カンガルーを見かけ、サファリパークのようで景色を見るのが楽しかったです。登下校や近隣の移動には、自転車よりもキックボードやスクーター（電動も多い）を使う学生が多く、新鮮な光景でした。道路は凹凸が少なく、なめらかなコンクリートで舗装されていたため、彼らが好んで利用する理由がよく分かりました。一方で、山がちな地形から急な坂道も多く、徒歩での登下校は汗をかくほどでした。他にも、8歳のホストブラザーは毎日、夕方暗くなるまで近所の友達と遊んでおり、その治安の良さや、皆裸足で外を走り回り、スポーツをする姿が印象的に残っています。現地の自由でのびのびとしたライフスタイルに惹かれるのと同時に、驚きの連続でありながらも日本の田舎の暮らしと共通する部分が多く、自然と馴染みやすさを感じました。

3.学校生活

私たちは、Yeppoon State High School（以下YSHS）公立高校に2週間通いました。YSHSには、Year7-12（中学1年生～高校3年生）の生徒が通っています。校舎が広く、各学年100人ほどなので、人数の多さを感じず、のびのびとした校風でした。特に印象的だったのは、先生がストライキを起こすために休校になったり、学期中盤で長期休暇を取っている先生が見られたことです。個人の自由や意思が尊重される文化を肌で感じました。学校生活は、毎日異なるバディと共にし、

様々な授業を受け、充実した時間でした。校内の牧場を使用する農業の授業や、自分たちで脚本から舞台まで用意するドラマの授業など、実践的な科目が多く設けられていたのが新鮮でした。AM・PMブレイクと呼ばれる30・40分の休み時間では学年指定の広場でご飯を食べたり、スポーツをしたりして過ごします。流行スラングを教わったり、ハンドボールをしたり(テニスボールを使い、手をラケット代わりに遊ぶ)、折り紙を教え合ったりと盛り沢山でした。Tuck Shopと呼ばれる購買があり、昼時になると大行列ができます。そこでは、バディお気に入りのMILOアイスを食べました。放課後は、ブラスバンドクラブを訪ね、パーカッションとして実際に参加しました。多くの部員が、今年日本で開催された万国博覧会で演奏したそうです。また、女子校St. Ursula's Collegeも訪問しました。その日は、前学期の成績表彰式で、優秀生徒にバッジを授与していました。金色に輝くバッジでネクタイが埋め尽くされている友人も多く、「勉強のモチベーションになっている」と誇らしげに教えてくれました。YSHS、女子校どちらの高校も、定員20人ほどで授業が展開されていて先生と生徒の距離が近く感じられました。また、率先して挙手をして答えたり、質問したりと生徒が主体的に授業に参加する姿勢が多く見られ、講義型授業が大半を占める日本の高校との違いを理解しました。

4.ホームステイ

私のホストファミリーは、フィリピンにルーツを持つ6人家族で、両親、三姉弟（姉、兄、弟）と愛犬のモカでした。私自身、フィリピンでボランティア活動をした経験があり、現地の様子や文化について語り合えたのも良い思い出です。加えて、同時期にドイツ人留学生（以下：TJ）も滞在していました。家の中は常に、オーストラリア、フィリピン、ドイツ、そして日本とマルチカルチュラルな環境で、互いの文化を共有し合い、とても充実した時間でした。各国の、免許取得、飲酒・喫煙制度の違いや学校の仕組みの違いなど、興味深い話題ばかりでした。特に、私と同年代でありながらホストシスターたちがお気に入りのお酒を紹介してくれたり、酔っ払いエピソードを語られたときは驚きました。ホストマザーの作る料理も様々で、和食、韓国料理など多くのアジア料理からTJのリクエストでジャーマンポテトを食べたときもありました。どの料理も本当に美味しくて、その中でも、フィリピン料理のアドボは格別でした。このように多様な食文化に触れられたことも、オーストラリアならではの貴重な経験でした。ホストシスターとTJは年齢が近いこともあり、ビーチや映画館、モールに行ったり、クッキーを作ったりと、沢山の時間を共にしました。海沿いにあるお店のジェラートがとても美味しくて、一緒に何度も通いました。ホストブラザーたちともバドミントンやビリヤードなどスポーツをしたり、ホストマザー主催の金曜日恒例カラオケナイトも楽しかったです。そして何より、食卓を囲みながら何気ない話で笑い合い、夜遅くまで語り合った日常が、代えがたい貴重な時間だったと心から感じています。TJを含む家族全員に温かく迎え入れてもらい、自然と心が落ち着き、ここが自分の居場所だと実感できたことが、本当に嬉しかったです。次は、日本で会おうと約束したので、再会に向けて英語力に磨きをかけていきます。出会えて本当に良かった、ありがとう。

5. 埼玉県親善大使として

・埼玉県プロモーション資料(プレゼンテーション)の作成
・さいたまクイズの作成(景品配布)
・日本(さいたま)フェアの開催
・次年度応募者に向けたプログラム動画作成
・SNSでの情報発信（@ambass_sq）

埼玉県親善大使として、主に以上の活動を行いました。 留学生仲間と共に、現地の中学生 (YSHS) および 小学生 (Emu Park State School) を対象に、プレゼンテーションを行いました。埼玉県の概要と魅力をカテゴリー別に分けて担当し、私は特産品である雛人形や押絵羽子板、麦わら帽子などについて紹介しました。単に情報を伝えるだけでなく、埼玉の魅力に興味を持ち、実際に体験してもらいたいとの思いから、関連するクイズ大会も実施しました。また、福笑い、折り紙、習字など、日本の文化に触れるフェアも同時に開催しました。生徒の皆さんが楽しそうに遊んでいる姿や、真剣に聞いてくれている姿を見て、「文化を伝えること」の達成感を強く感じました。クイズの正解者には、私の故郷で

ある春日部市を舞台にしたアニメ「クレヨンしんちゃん」のシールを配布しました。クイーンズランド州では、日本語を第二言語として取り入れている小学校が多く、中・高等教育でも日本語が人気科目の一つであることから、日本や埼玉について既によく知っている生徒が多数おり、大変嬉しく思いました。次年度の応募を検討されている方々に向けて、Instagram（@ambass_sq）で現地での様子を発信しました。興味や質問のある方は、ぜひアカウントをチェックしてみてください。さらに、このプログラムを広く可視化するため、旅の全般をまとめたショート動画も作成しました。近々、YouTubeにて配信を予定しておりますので、そちらもぜひご覧ください。

6. 発見

6—1 Appreciation of our own culture

TJとの会話で、私は何気なく、“thank you”・“sorry”と口にしていました。すると、“For what?”「なぜ謝るの？」「感謝することでもないよ」という返事が返ってきます。感謝や、気遣い、お詫びの情をまめに言葉で表すという慣習が、他国では必ずしも当たり前ではなかったり、むしろ不自然に映ることもあるのかもしれません。こうしたやり取りを通じて、自国の文化を再度見つめ直すことができたと感じています。そして、異なる背景をもつ人々と十分に理解し合うためには、互いの文化を尊重し、知ろうとする姿勢が欠かせないのだと実感しました。

6-2 How To Define Your Happiness

イェプーンの人々の楽観的で前向きな考え方、穏やかなライフスタイルに惹かれ、出会う人にこんなことを尋ねてみることにしました。“What makes you happy?”—「家族」「絵を描くこと」「愛犬と遊ぶこと」「海でセイリングをすること」「金曜日にパーティーでお酒を飲むこと」といった返事が多く、それぞれが身近にある幸せや、喜びに目を向けていました。私がつい見落としがちな「当たり前」に感謝し、思い切り楽しんでいるように感じました。これまでは大きな成果を追い求め、物事を悲観的に見てしまうことが多かった私ですが、この経験を通して、小さな成長や勝利に目を向けるきっかけになりました。

6-3 SNS規制

昨年、オーストラリアで世界初のSNS規制法が制定され、今年の冬には16歳未満の子どもに利用制限がかけられる予定です。現在、世界中で子どもや女性を対象にしたオンライン搾取問題が深刻化しており、その中でもフィリピンが最上位国となっているため、昨年度ボランティアに訪れた私にとって、特に注目しているトピックでした。ホストマザーは「子どもを守るための妥当な判断だ」と評価する一方で、具体的な運用方法が明確でなく、オンラインに精通した子どもであれば容易に制限を回避できてしまうのではないかと懸念していました。また、学校でも友人を含む、生徒全員が、使用制限について嘆いていました。SNS依存や犯罪、いじめなどの問題は日本も同様であり、効果的な使用方法について、国境を超えて考えていく必要があると再確認しました。

7. さいごに

6章にわたり、少々長々と綴ってきましたが、実際にはここに書ききれないほど大変多くの学びと出会いに恵まれました。他の親善大使の仲間と共に活動できたことも、かけがえのない思い出で

す。120％吸収する思いで臨んだこのプログラム。日記をつけてみる、分からないことがあればその場で聞く、日中は必ずリビングで過ごすようにする、ホストシスターに「ビーチに行こう」と誘ってみる、そんな小さな挑戦の積み重ねが、人とのつながりを生み、経験を何倍にも豊かにしてくれました。

“It’s all up to you.”—「すべてはあなた次第。」現地で何かを迷ったとき、よくかけてもらった言葉です。個人の自由や意思を尊重する、オーストラリア、イェプーンならではの声かけなのかもしれません。実際に、私自身も、自分の行動次第で到達点をいかようにも変えられることを、この留学を通して実感しました。そして、まだ知らない世界や、学び、挑戦すべきことが無限にあると気づき、私の好奇心に更なる拍車がかかりました。以上の貴重な経験を糧にし、自分の世界を広げる努力を続けていきます。

改めて、このような素晴らしい経験の機会をくださったすべての方々に、心から感謝いたします。